こうした太平洋戦争後半の戦局の展開を念頭に置き、徳之島の戦争死者の慰霊施設を訪れると、特攻基地の慰霊碑や沈没輸送船・疎開船・戦艦の慰霊碑など太平洋や東南アジアの島嶼域が巻き込まれてきた戦局の相似形をそこに見出せると同時に、慰霊施設や慰霊祭が島の文化や自然のあり方に規定される性格をもつことも確認することができる。

徳之島亀津港の北側の高台に「なごみの岬公園」がある。こゝは、一九四四年六月二九日朝に亀徳沖で撃沈された輸送船富山丸の犠牲者のための慰霊塔が立つ場所である。輸送船富山丸は、独立混成第四四・四五旅団を中心に四千人以上の兵員を乗せ、一九四四年六月二七日正午鹿児島港から沖縄に向けて出航し、二九日午前七時二五分徳之島亀徳沖二カイリを航行中に米潜水艦スタージョンの魚雷攻撃により亀徳沖に沈み、三千八百名以上の死者を出した。

こうした富山丸の犠牲者と関わる場所は、地元では一方でコーティナイ(背筋が寒くなる)と表されるような所であったが、現在ではその痕跡は見られず、慰霊塔の周辺はきれいに整備されている。毎年春に富山丸遺族会全国連合会のメンバーがここで慰霊祭を行う。徳之島の植生とは一見異質なオリーブの木が目にとまるが、これは、同遺族会が一九九九年から二年がかりで約四千万円をかけて名碑の建立や一帯の整備を行い「なごみの岬公園」と命名した際に、平和祈念の象徴として犠牲者にゆかりのある小豆島より植栽されたものである。そしてオリーブフェスタを行い、徳之島出身のギタリストの演奏によるフラメンコの披露など、オリーブと徳之島の闘牛からスペインが

連想されるイメージ作りなどがなされた。

島外から来る遺族たちにとって、物理的距離の制約から慰霊塔の管理を島の人々にお願ひせねばならないという問題が一方にあり、他方で慰霊祭の継続がもう一つの懸案事項として存在している。したがって、こうしたイメージ転換は、島民や外部の人間を巻き込む形で慰霊祭を継続させたいという遺族たちの趣旨に沿ったものであるということが理解できる。死者にまつわる歴史的事実の記録を保持しようとする理性的な努力の一方で、そうした祭りの祝祭的側面が慰霊を継続し、他者を巻き込む力を持つと意識されている。

さらには、自然のもつ超然としたリズムが、慰霊にかかわる人々の感性的・情緒的部分に訴えて死者の弔いを促しているということも確認することができる。近年、アジア太平洋戦争の旧戦地での慰霊や遺骨収集について調査・研究が進みつつあるが、戦争死者の死のあり方を問うと同時に、環境が及ぼす戦局そのもののあり方や慰霊の展開にあたえる影響をも視野に入れることで、慰霊に向かう人々の努力の方向性と、それに対して自然がもたらすものが見えてくるはずである。

死者の棲むランドスケープ

——公園緑地協会の墓苑構想について——

土居 浩

日本における墓制の近代性を考察するにあたり、いわゆる「霊園」として人口に膾炙した公園墓地は、物理的側面はもち

ろんのこと、その思想的背景についても無視できない重要な空間的実践である。大正・昭和戦前期に東京市の霊園行政を牽引した井下清(一八八四—一九七三)についての考察(拙稿「墓地の無縁化」をめぐる構想力」『比較日本文化研究』十、二〇〇六。ほか)を踏まえ、本発表では別の系譜を辿ることにしたい。

東京のみならず日本全国に公園墓地を浸透させたキーパーソンとして、東京市公園課長であった井下がいたことは、早くに造園学において榎村久子(「多磨墓地をはじめとする公園墓地の成立・展開と今日的課題」『造園雑誌』五五—五、一九九二)が指摘した通りである。その一方で、佐藤昌(『西洋墓地史(II)』日本公園緑地協会、一九八八)の指摘も重要である。すなわち戦後に全国各地で展開した公園墓地の設計・計画に多大な影響を与えた「墓地計画標準」(昭和三四年五月一日建設事務次官通達)は、戦前の内務省官僚・北村徳太郎(一八九五—一九六四)の意志が、建設省官僚へ継承され結実したものであるとの指摘である。たとえば一九三七年にドイツで内務大臣通牒として出された「墓地築造標準」などは、その年内に公園緑地協会(後述)の機関誌『公園緑地』に北村の翻訳で紹介されており、その関心の高さがうかがえる。

戦後の「墓地計画標準」に関連し注目すべきは、北村が創立・運営に深く関与した公園緑地協会(現・日本公園緑地協会)である。会長に内務次官を推戴し、理事・評議員に学識経験者・中央省庁幹部・地方公共団体首長および担当課長を、幹事に内務省職員および全府県の都市計画地方委員会等の担当官を委嘱したこの会は、公園その他緑地保育事業の普及発展を

図ることをもって目的とし、事業の範囲として、公園・運動場・動植物園に並び「墓苑」の事業計画を「樹立または指導」することを掲げている。『日本公園緑地協会五十年史』に拠れば、戦後の昭和二二年から四二年までに地方公共団体からの依頼に応じ、技術的指導や、計画立案・設計策定を受託した件数は一一一件を数え、そのうち墓地単独は十二件が確認できる。

たとえば昭和三四年の設計となる大分市丸山墓園については「公園的墓地として代表的なものとなるよう、従来の公園と墓地を併置した様式によらず、墓所群そのものが修景的要素を構成するようにすること」として、墓所そのものの面積は全体の三〇%以下にしており、結果、市側から要望された墓所数には足りない設計となっている。この不足については納骨堂および将来の土地拡張で補うよう想定されており、公園緑地協会の墓苑構想において、何が優先されたか／されなかったか、よくわかる象徴的な事例といえよう。

公園緑地協会の墓苑構想は、現在にも引き継がれている。それは「墓地計画標準」に替わり公園墓地の設計・計画に影響を与えている「都市計画運用指針」(平成二二年一月二八日建設省都市局長通知)のいう「墓園」である。現行の第六版に拠れば「墓園とは、自然的環境を有する静寂な土地に設置する、主として墓地の設置の用に供することを目的とする公共空地」である。つまり墓地がその中に含まれる公共空地なのであり、換言すれば、墓地を内包する緑地となろう。この場合、力点はあくまで緑地にある。その点、同じ公園墓地の理念を共有しつつ、その名称として「霊園」を選ぶことにした東京市公園課と

は、微妙なずれがあるといわねばならない。そのずれはおそらく、公園墓地を導入した各地の実践経緯を辿ることで、より鮮明に浮かび上がるだろう。今後の課題としたい。

墓と人のエージェンシー

——現代沖繩における墓の変容を事例に——

越 智 郁 乃

本論では、モノのエージェンシー（行為主体、行為能力）という概念を用いて、墓における「モノ」の変化を捉え直す。近年、人類学において、客体として操作される物体として「モノ」を捉えるのではなく、「モノ」と人のあいだのネットワーク、越境、ハイブリッドといった現象に目を向ける研究が進められている。沖繩において「あの世の家」とされる墓も、その快適さ如何によっては子孫に影響を及ぼす存在であることや、墓自体に人間同様に年忌供養を行うことが知られているように、人格的存在として、そのエージェンシーが認められる。しかし、沖繩の墓制研究を概観すると、各地域の墓制の多様性や墓地風水に関する研究を中心に進められてきた。中国由来の墓地風水が琉球王府の士族層を経て、二〇世紀初頭にかけて庶民層に広がる中、斜面を掘込み、外面に琉球石灰岩を積んだ墓形が広がった。一九四五年以降、火葬の急増に伴い洗骨が減少し、墓は小さくなる。またコンクリート建材の使用により、平地型の墓が増加した。集団墓地の増加、八〇年代以降の経済発展による

墓石業者の参入により、現在、輸入石材、特に花崗岩が墓石として用いられている。こうした外来の「モノ」を用いるという変化はこれまで否定的に捉えられ、墓制研究の範疇に入っていない。そこで操作、管理されるだけの単なる客体としての墓としてみるのではなく、「モノ」の変化によって主体としての墓が人とのように交渉しあい、そこにいかなる新たなエージェンシーが生まれるのかということに注目する必要がある。

本論では本島北部農村からの移住者が那覇市某所に一九五四年に造墓した集団墓地を事例に、墓での祭祀や改修を通じて現在に至るまでの実践と当事者の語りを資料として、墓と人の相互交渉に関する考察を行った。戦後各地から本島中南部への人口移動が増加する中、事例村も移住者を多数排出した。移住先での互助組織である郷友会会員の内一六名が墓地建設組合を結成し、一六株（集団）の模合により長屋形式の一七口の集団墓地（内一口は共同墓）を造った。一人の株持ちに対しては、出身村で同じ門中墓を使用していた移住者が賛同・出資し、同じ墓内に入る権利を持ったという点では、出身村における門中の繋がりが継続している。その一方で、移住者の人生の証しとして墓を造ったと考え、継承していこうとする子孫の姿から、墓に記憶を表現し、また墓から記憶を引き出している墓と人の相互交渉が明らかになる。さらに、造墓過程や改修における「モノ」の変容に注目してみると、米軍基地建設を契機に戦後広がったコンクリート建材を「新しいものがよいもの」「よいものを墓に用いる」という理由で墓に用いていた。沖繩では台風や強烈な日差しにより墓が劣化するため、その都度改修を繰り返す必